

本を読む夢

(音信不通 ⑬)

奈良 敏行



夢の中で本を読む。寢床で本を読んでいるとそのまま眠り込んでしまうことがある。残像がしばらくつづくのだろうか、自分が寝ていることに気がつかず、一頁ほど読み進んでいることがある。

ときに漠然と数行が記憶に残り、覚醒して本と照合することがある。むろんまったく違っている。夢の中で続きをよんだのでなく、読んだ夢を見たに過ぎない。

でも、なにかしら得しているような気がして、うれしいことと心に秘めていた。夢の中の良いことは、口にするものでない、と耳にした記憶がある。

この自分の秘め事は口にせず、なにかの弾みで、ある人

に尋ねた。「夢の中で本を読むことってあるのかな?」
と。「ありますよ」との返事だった。四部作の小説で、
作者が二作目でなくなつた。この続きを夢の中で読んだと
いうことだった。恋愛が成就するという展開で、安心した
とのことだった。

わたしの場合は、ほんの数行で、向こうは一冊だから、
これはポリリウム感で負けている、と思ひ少しがっかりし
た。

量的に負けたのが残念だったが、誰でも同じような心の
働きを持つているということに、考えてみればあたり前だ
が、自分のうれしさが色あせるようにも感じた。

ところで、現実の書物と夢で読む書物は、どのように異
なるのだろうか。夢で読む、というとき、夢物語という話の
道すじではなく、文字通り夢の中で活字を目にする、とい
うことを言っている。

昔、夢の中に出てくる「ハシゴ」がこわい、という人が
いた。四角い三角という言葉が像を描けないように、夢の
なかの「ハシゴ」もイメージできない。「ハシゴ」がこわ
い、といわれてもわからないが、こわいのが「ハシゴ」の
形をしている、といわれれば、これは少しわかる。「ハシ
ゴ」はどうでもいいのであって、「こわい」のがすべてだ。
それと夢の中の「書物」がどのように関係するのだろうか、

自分でもだんだんわからなくなってきた。正確にいうと、夢の中に登場するのは文字列であって、本の形をしているわけではない。むしろ「ハシゴ」に似るといふべきか。

前回『心の起源』（中公新書）が品切れになったようだが、述べた。電子書籍では入手できることにたまたま気づき、購入した。わたしは本に傍線を引かないと読めない。ポルダリングのように、そこを足場にしないと先へ進めない。記憶力と理解力が弱いので、後でその部分をノートに抜き出す。電子書籍だと、黄色でマーカーをつけ（ハイライト化）、「ノート」を選択すると、ハイライトだけ抜き出される。この仕組みが面白いので、最近よく人にもすすめている『人はなぜ物語を求めたのか』（ちくま新書）も、更に電子書籍で購入した。最終的に傍線部分だけ抜き出すので、夢の中で出合う文字列のようにも思える。「ハシゴ」と見せなくもない。

じつは、順序が逆で、タブレットで電子書籍をスワイプしながら、「夢の中の文字列」を思い起こしたのだ。

二十代の頃、夢の中の文字列を持ち帰れたら、その一冊でことうりという考えに、脅迫にとらわれた。自分の「学び」に疲れていたのだ。自分で考えなくても、すべてがここにあるのではないかと戦慄した。何かを終わらせたかったのかもしれない。ある日、一行だけ持ち帰れた。後は

自分でつないで造形した。こんな形をしていた。

しししゅ……………しししゅ／かなこでてのる／は
なににするにれの／識（しき）の分界けも綜言（そ
うげん）ふ／これ定めてあをと表（おもて）と
おく／（中略）／どれんとはんぱ／ししし
ゆ……………（第一期『音信不通』七号より「どるんて」）
これがわたしの意識の涯でだった。

2017.10.20

（参考）

木下清一郎『心の起源』中公新書 2002

千野帽子『人はなぜ物語を求めたのか』ちくまプリマー新書

2017